



石神井中だより

練馬区立石神井中学校

校長 櫻井 弘

令和3年9月6日

第5号

T o k y o 2020 大会より

校長 櫻井 弘

まだまだ残暑が厳しい中ですが、2学期が始まりました。夏休み中は緊急事態宣言が出ていて自宅で過ごす時間が多く、テレビでオリンピック・パラリンピック大会を見ていた人もたくさんいたと思います。無観客での開催となり直に見ることはできませんでしたが、この東京2020大会で皆さんは、どの種目が、どの選手が、どんなプレー（場面）が印象に残っているでしょうか。そしてそこからどんなことを感じたでしょうか。

勝った時、優勝を決めた時、メダルを獲得した時など、どの選手も素晴らしい笑顔や感情を爆発させていました。そんな中で、オリンピック柔道男子の大野将平選手、阿部一二三選手、空手男子形の喜友名諒選手の対戦相手への思いやり、また、感謝の思いを「礼」に込めた態度がとても印象に残っています。



また今大会から登場した「スケートボード」

特にストリートに出場したフィリピンのダイダル選手には、今までの競技の常識を覆されるような衝撃を受けました。採点種目ということでは、体操やアーティスティックスイミングなどと同じなのですが、一緒に競技している選手同士が技の出来映えを楽しみながら競い合い、他競技者をライバルではなく仲間として心から応援している様子は人間的魅力が溢れていました。そして、卓球混合ダブルス、女子バスケットボール、飛び込み、バドミントンミックスダブルス、体操、他にも多くの種目で、最後まで諦めず頑張ることが好結果に繋がった場面が随所に見られました。

パラリンピックでは、パラアスリートのパフォーマンスに感動しました。障害があることを感じさせないどころか、その競技レベル高さ激しさには本当に驚きました。障害に負けずに立ち向かい、残されている機能を最大限に活用するために工夫し挑戦し頑張り続ける心、そしてこのレベルで競技できるようになるためにどれだけ練習してきたのか、練習環境やサポート体制を整えるのも大変であったと思います。また、楽しそうに一生懸命に取り組むその姿から「挑戦」「勇気」など様々なメッセージを受け取りました。



満足のいく結果を得た選手もそうでなかった選手も、同じように口にしていたのは「指導してくれた方々、お世話になった方々、応援してくれた方々への感謝」と「自分の結果（パフォーマンス）が少しでも誰かの力になれば嬉しい」ということでした。

残念だったことは、無責任なSNSなどによる選手や審判への誹謗中傷があったことです。しかし、思うような結果にならず「一番ガッカリしているのは選手自身」であり、競技の関係者誰もがベストを尽くしていると思います。自分のひいきの選手を負かした相手を誹謗中傷するなどってのほかと感じました。「自分のおしゃくしゃした気持ちを晴らすために人を貶めることを平気でしてしまう人がいる」この報道を聞いてとても悲しくなりました。

今回のT o k y o 2020大会では、コロナ、人権、インクルーシブ、バリアフリー、思いやり、復興、挑戦、テクノロジーなどたくさんのキーワードがあったと思います。文化・国籍など様々なことを超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献するため、この大会から感じたことを大切に、今後の生活をより充実させていきましょう。